

Rirkrit Tiravanija

Nick Mauss

APRIL — MAY / 2019

**MISTLETOE OF TOKYO
EXHIBITION WORKS**

1

① Rirkrit Tiravanija リクリット・ティラバーニャ

1961年、アルゼンチン生まれ。コロンビア大学美術学部教授。アートの中に日常的な活動である料理や読書、音楽などを取り込むスタイルのインスタレーションで知られ、コミュニケーションアートを位置づけた。現在はニューヨーク、ベルリン、チェンマイを拠点に制作活動。主な展覧会に2015年「Tomorrow is the Question?」(ガレージ現代美術館、モスクワ)、2014年「Focus Rirkrit Tiravanija」(フォートワース現代美術館、テキサス)、2013年「Oktophonie」(パーク・アヴェニューアーモリー、ニューヨーク)、国内では2015年「誰が世界を翻訳するのか」(金沢21世紀美術館、金沢)、2014年「Imagineering Okayama Art Project」(岡山 城天守閣広場)、2012年「Untitled 2001/2012」(Gallery Side2、東京)他。ヴェニス・ビエンナーレをはじめ、国際展にも多数参加し、2017年ヨコハマ・トリエンナーレでは、構想会議のメンバーに選出された。

COMMENTARY

90年代のコミュニケーションアートの代表的なアーティストである。代表作としては、展覧会の初日にギャラリー内でカレーライスを作り、来廊者に振る舞った作品がある。彼はカレーを作り人にそれを振る舞うことで生まれる会話がアートだと捉え、コミュニケーションアートの制作を行っている。今回展示している作品は、第1回目の横浜トリエンナーレにおいて、リクリットが北九州から会場である横浜まで、ドライブをしながらフィールドワークを行った作品を発表した。その時に使用した車のタイヤ痕から作品を作製し、自らがその作品を見て旅を思い起こしたり、見る人間にとっても自らが初めてドライブに行った記憶を想起させる作品である。この作品は、見る側の気持ちの状態によって、常に受け取り方が変化していくものである。

② Nick Mauss ニック・マウス

1980年生。ニック・マウスは、ベルリンとニューヨークを拠点に活動をしているアーティストで、ドローイング、ペインティング、彫刻、そしてパフォーマンス等、多岐にわたる表現方法で作品を制作しています。特に紙の作品では、インク、水彩、パステル、色鉛筆、チャコールペンシルと多くのツールが使用されています。不確定で曖昧な表現を好み、意図的に形やオブジェクトを歪める作風は、鑑賞者の想像力を喚起し、作品の解釈の可能性を無限に広がります。

2012 Whitney Biennial, ホイットニー美術館 (ニューヨーク)

2011 Reversible Surface, ヒロミヨシイ (東京)

2010 Greater New York, MoMA PS1 (ニューヨーク)

2009 Contemporary Drawings Collection, MoMA (ニューヨーク)

2008 have meant, ヒロミヨシイ (東京)

2007 One Season in Hell, ギャビン・

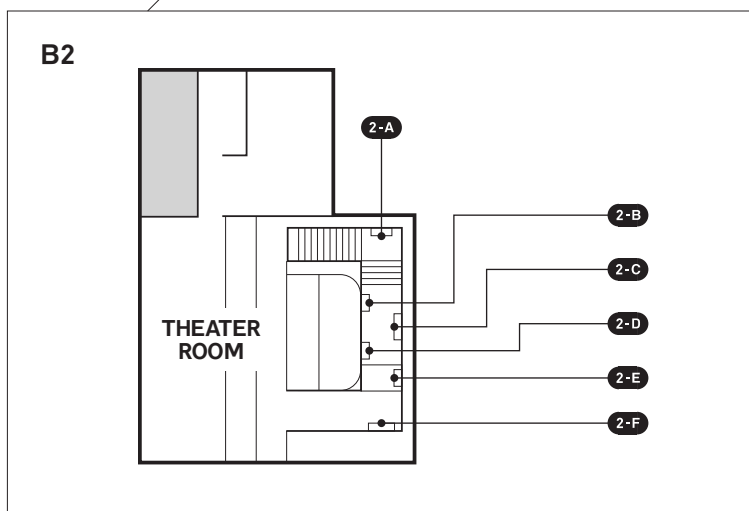
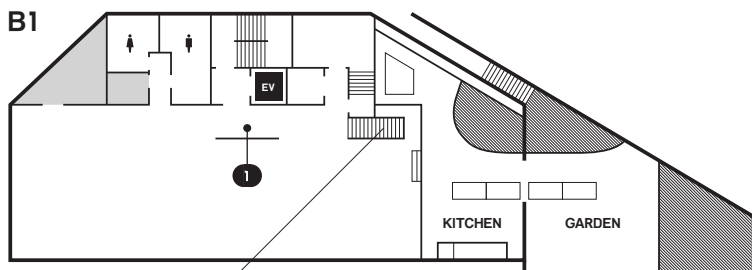
ブラウン エンタープライズ (ニューヨーク)

2005 ダニエル・ライヒ ギャラリー (ニューヨーク)

COMMENTARY

ニック・マウスが作るドローイングの作品はそのすべてにおいて、作品を完成させないものである。制作をその過程で中断することによって、見る側の気持ちを作品に入れ込んでいく要素がある。

EXHIBITION WORKS FLOOR MAP



1 Untitled 2-A Put Your Body in It 2-B Untitled 2-C Untitled

2-D Untitled 2-E Untitled 2-F Continuing